

宇和島から南に向かって車を走らせ1時間、西海半島に入る。内泊、中泊、外泊と集落が続き、その先は自衛隊が造った道路が高茂岬まで10^キほど。間に人家はない。亜熱帯植物の茂るくねった道を、セキレイが尻を振りながらコッチコッチと案内してくれる。

長い緑のトンネルを抜けて突端に着く。いきなりウアツと目に飛び込む光と海。高茂岬、猛々しさも柔らかな原風景だ。車を降りると、旧日本海軍の防備箇所跡の広く平らかな草地があり、いつもきれいに維持されている。ここにアトリエを建てたいなあと思想した場所でもある。

先端に歩を進めると、豊後水道を180度見渡せる海、海、海。地球が丸い。

沖には名磯(岩礁)のアブセ、ヤツカンが見える。彼方からのうねりが黒い岩肌
に白い波となつて碎ける。かつてこの辺り一帯の磯に船で渡り、父と釣りをした。東京を引き揚げた25歳の頃には年に20回以上も行っている。磯から見る朝焼け、夕焼け、満天の星に放心し、ある時は目の前に次

高茂岬

々と落ちる稲妻に身を縮め、またある時は、荒ぶる冬の海に自虐的愉悦を覚えたりもした。

しかし2年後に父はがんになり、半年苦しみ57歳で死んだ。ほとんど対話のなかった父親。最後に用意されたかのような、釣りを通しての接触であった。

焼き場で骨壺に納めたるばかりであった高茂岬

後、残った骨を黄瀬戸の壺に入れて持ち帰った。車で高茂岬に行き、高さ1000^ミもある崖を海つづちまで下り、撒いた。今行くところ、こんな所をと足が竦むが、ギザギザの磯で大物と格闘し飛び回っていた頃、平気だったのだ。ここが僕



にとつての父の墓になった。

その後、喪を挟んで1、2年は1人で釣行したが、スポーツフィッシングといった様相に変貌する磯場に肌が合わず、やめてしまった。これまで海から見上げるばかりであった高茂岬

が、今はそこに立ち、思い出と共に遠望する場所に変わった。

ここをアンデスに見立て、空高く飛ぶコンドルならぬ鷹を目で追いながら、アルトリコーダーをケーナの代用にフォルクロレを吹いたりしたのも懐かしい。道行きの不便さや、何の客寄せ設備もないせいにか、人に会うことはまずない。僕にとつて、果てのない無国籍な場所であった。行く度にさまざまなる表情を見せてくれる海景。ハマゴウ、ハマユウ、ノジギク、ツツブキ、トベラと、季節の花々も迎えてくれる。誰も自然が好きと言つが、なぜか人は人混みに寄って行く。おかげで僕は人界を離れ、この雄大な岬に、密かに紛れ込む。

(吉田 淳治・画家)